写真 4-11 備前焼甕

写真 4-12 青花皿

写真 4-13 青花皿

写真 4-14 河原石

写真 4-15 石積み区画西端（5tr）

写真 4-16 曲輪Ⅰと曲輪Ⅱの間の石積み区画（12tr）

（４）土井城跡

１）立地

標高約 110mの天徳寺裏山に位置する。城の西側を熊野参詣道大辺路へ至る陸路が通る。平野側（安宅荘側）と山地側（富田荘側）の両者に対して横堀や堀切などの有効な防御施設を整備し、街道への備えとしての役割を果たしていたと考えられる。

写真 4-17 土井城跡　遠景

２）縄張りの特徴

城の規模は南北約 240m、東西約 80mを測る。北西から南東方向に伸びる尾根を連続堀切により分断し、尾根上に 4 か所の曲輪を配置する。防御正面の平野部側には、二重の横堀を巡らせている。

３）調査成果

曲輪Ⅰは、一辺約 7mの正方形状を呈している。造成はやや甘く、特に東側はそれが顕著である。居住空間としては狭小に過ぎるが、見張台などの簡易な施設であれば設置することも可能であり、また曲輪の中では最高所に位置しているので、見張台としての役割は充分に果たせたと考えられる。

曲輪Ⅱは、東西 13.6m、南北 32mを測る。土井城跡の曲輪の中では最大規模を誇る。造成も他の曲輪と比較してきちんとしており、東辺には低い土塁が築かれている。また土塁の内側には石積みが認められる。石積みは曲輪Ⅰの宗教施設に伴う可能性もあるが、土井城において主たる居住空間として用いられたと考えて差し支えなかろう。

曲輪Ⅲは、東西 20m、南北 7.2mを測る。曲輪の東辺と西辺が土塁で囲まれていて、この土塁の一部には内側に石積みが認められる。曲輪Ⅱと比較して、やや面積は狭くなるが平野部側に向けた防御の拠点として活用されたと考えられ、南端隅には櫓台状の高まりがあることも注目すべき点である。

曲輪Ⅳは、造成が非常に甘く判断が難しいものである。ただし、曲輪Ⅳからさらに尾根伝いに上った場所に連続堀切が築かれていることから、城域内に含めるべきものであり、平坦部に残る 3 段の石積みの性格をはじめ、その利用方法については確認調査の実施を含めたさらなる検討が必要と考える。

横堀 1 は、東西方向に約 64m、堀底平坦部の幅が約 4mを測る。土塁の幅は 1m以上あり、天端部において人が活動するのに充分な幅と平面をもたせている。現在では部分的にしか確認できないが、土塁の両側を石積みによって補強している。内側の石積みには、土塁を補強する意図と堀の内部の面積を確保する役割を同時に果たしている。また東端部は、自然地形を改変し虎口をつくりだし、その外側に石積みが施されている。

横堀 2～3 は、平野部からの攻撃の遮断施設としての役割を担っている。またそれぞれの横堀から竪堀が伸びている状況も確認できている。

堀切は、城域内の北側尾根に集中している。つまり、富田荘側への備えとして尾根を寸断して堀切を築いており、曲輪Ⅰの直下に位置している堀切１については岩盤を削り、大規模な土木工事をおこなっている。

堀切 2～5 は、連続堀切である。追加指定候補の勝山城跡にも五重の堀切と三重の堀切が築かれているが、それらよりもやや造成は甘いものになっている。ただし、堀切の間に竪堀を配置するなど効果的に防御施設を配置しており、尾根上を守るには充分な効果があったものと考えられる。

発掘調査は実施されていないが、堀切１の周辺において 15 世紀～16 世紀代の備前焼甕の底部片が表採されている。

調査年度	調査主体	調査方法	調査成果の概要
平成 18 年 (2006)	日置川町 教育委員会 (和歌山県 文化遺産課)	簡易測量調査	・ 尾根筋の堀切群や曲輪、竪堀を確認。
平成 20 年 (2008)	白浜町 教育委員会	測量調査	・ 城跡範囲の把握。

写真 4-18 横堀１の土塁石積み

写真 4-19 堀切１

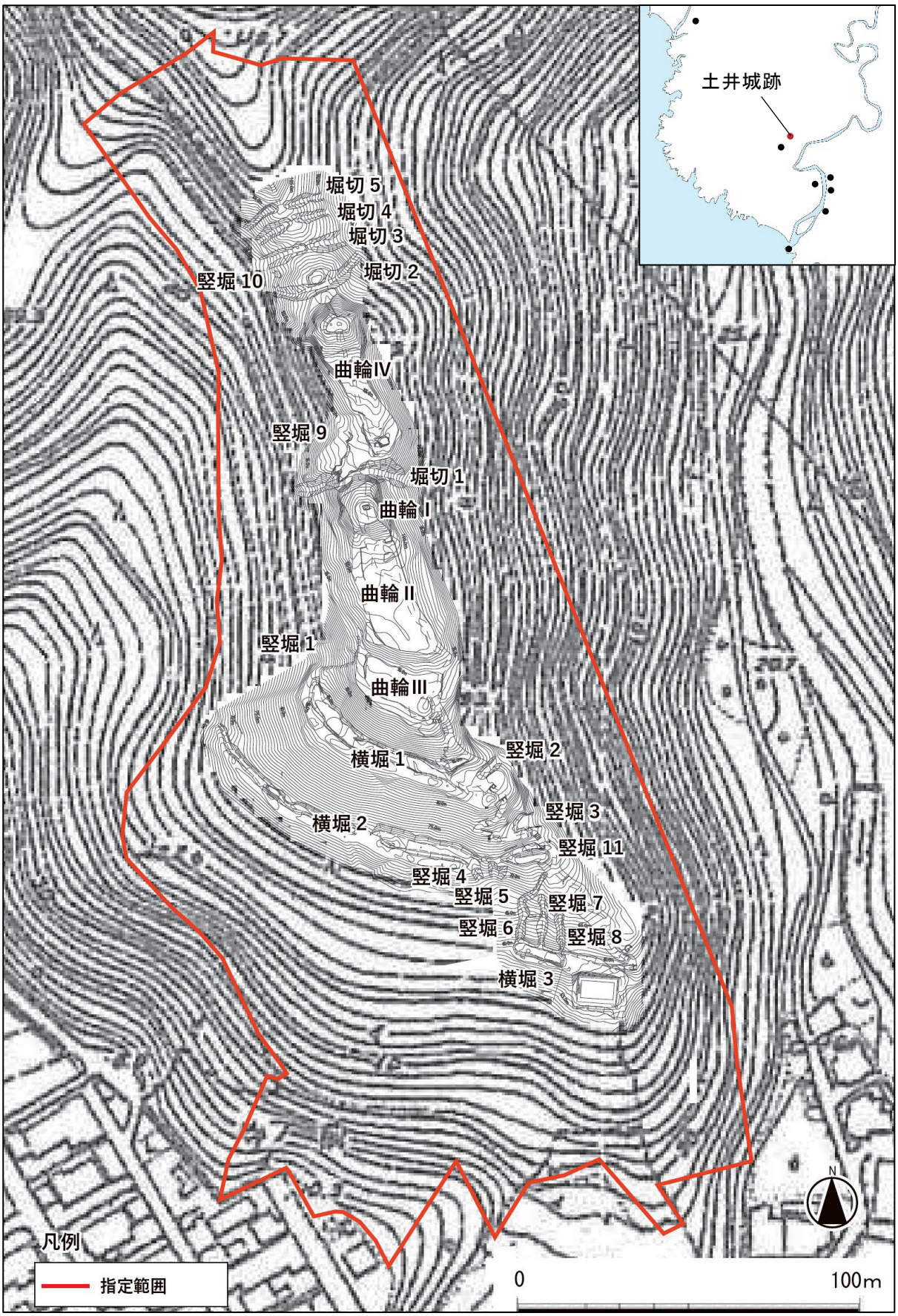

図 4-11 土井城跡　指定範囲と測量図

（５）要害山城跡

１）立地

安宅荘と富田荘の境目地域に立地し、城域の東側を熊野参詣道大辺路富田坂が通っている。熊野参詣道の安居辻松峠から南へ向かうと土井城西側を通り、安宅荘に入る。つまり安宅荘と富田荘を結ぶ陸路の両端に要害山城と土井城が配置されている。一方で、安宅氏と友好関係にあった久木小山氏との境界である北側にはこうした城が認められない。このことは、安宅氏が北西側からの侵攻を警戒していたことを示すと同時に、戦国期の紀伊半島の政治情勢の一端を示していると考えられる。

写真 4-20 要害山城跡　遠望

２）縄張りの特徴

城の規模は南北約 180m、東西約 50mで、東から西に延びる尾根を 3 つの堀切により分断し、尾根先端付近に 3 つの曲輪を配する。

曲輪Ⅰは東西約 28m、南北約 12mを測り、平面形は倒卵形状を呈する。標高は約 88mを測り、ほぼ平坦である。曲輪Ⅱは、曲輪Ⅰの西側に位置し、曲輪Ⅰとの比高は約 5.5mを測る。曲輪の規模は東西約 8m、南北約 25mで、平面形は半月状を呈する。曲輪の周囲には幅約 1.5mの土塁がめぐる。土塁は西側の一部が切れており、その部分は平入りの虎口となっている。曲輪Ⅲは曲輪Ⅰの東側に位置し、曲輪Ⅰとの比高は約 7mを測る。規模は東西約 10m、南北約 16mを測り、3 つの曲輪の中でも最も小規模な曲輪である。畝状空堀群は、城跡の西側を中心として、北西側や北側斜面にも築かれている。さらに、曲輪面からの比高が西側斜面では約 11m、北側斜面では約 17mでそれぞれ離れた位置に築かれている。曲輪面と防御ラインがやや離れているため、曲輪面積に対して城域が広い構造になっている。

東側の尾根には 5 本の堀切・竪堀が設けられている。完全に尾根を遮断しているのは 2 本だけであり、堀切・竪堀を組み合わせて尾根上のルートを屈曲させていると考えられる。この尾根は、竪堀 14 の地点をピークとして北東方向と南東方向に延びる。

また、富田荘に面する城の西と北斜面には、畝状空堀群や横堀が認められるなど、西側と北側を強く意識して防御施設を配していることがうかがわれる。

３）調査成果

発掘調査では、柱穴や土坑が検出されているほか、虎口部分における門跡や鍛冶炉と考えられる円形の土坑が検出されている。土坑底面が堅く焼き締められており、その内部に炭化物が充填していた。ただし、土坑の直径が約 40cm で、焼き締められている範囲については約 20cm 程度の小規模なものであるため、簡単な野鍛冶程度であったと想定される。

土塁部分の断割調査によって、土塁の内側に石積みが施されていることが確認できた。この土塁の内側を石積みによって補強する技法については、安宅荘内の城跡に共通するものである。

土塁石積みについては、八幡山城跡の土塁と比較して狭小なものとなっているが、石積み自体は面を揃えて整然と並べられている。この土塁内の石積みの技法は、安宅氏城館跡の特徴のひとつである。

また、曲輪Ⅱの土塁の切れ目になっている部分は、発掘調査により虎口として確認された。土塁の断割調査と同様に虎口付近の土塁においても石積みが施されていた。そのほか、敷石や階段状石積み、門跡と考えられる柱穴跡など虎口に関連する調査成果が得られている。

出土遺物は、生活用具である備前焼のほかに、白磁、青磁、青花の破片や瀬戸美濃系天目茶碗、碁石といった単なる前線基地以上の内容がみつかっている。また、土坑の焼土と炭化物が、第２次調査ではより多く検出されている。検出された土坑のほとんどから炭化物と鉄滓（鉄塊）が出土し、鍛冶炉と考えられる小規模な土坑も検出されている。その他の鍛冶関連遺物として、砥石や鉄床石等が出土している。

調査年度	調査主体	調査方法	調査成果の概要
平成 17 年（2005）	日置川町／白浜町教育委員会（滋賀県立大学考古学研究室）	測量調査	・ 城跡範囲の把握。
平成 18 年（2006）			・ 城跡範囲の把握。
平成 21 年（2009）	白浜町教育委員会	試掘確認調査	・ 曲輪Ⅰの調査。
平成 22 年（2010）			・ 曲輪Ⅱの調査。

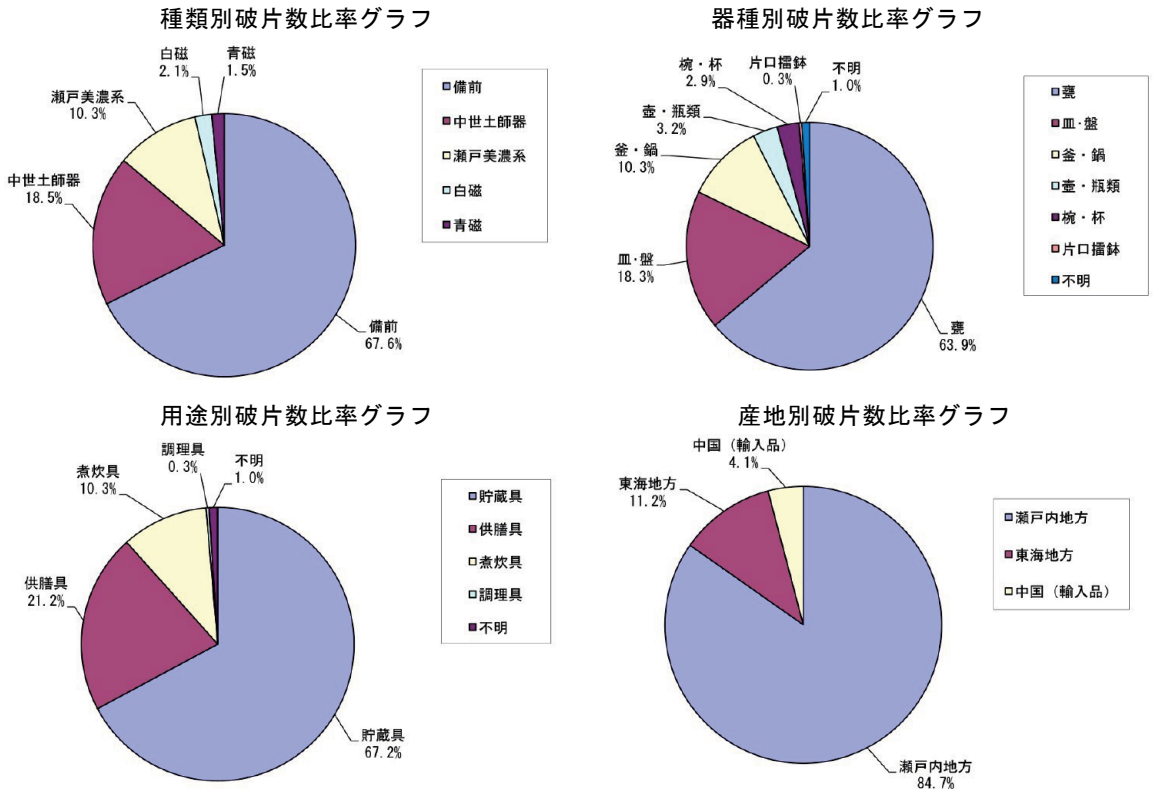

図 4-12 要害山城跡出土の中世遺物組成比率グラフ（北野 2017 より抜粋）

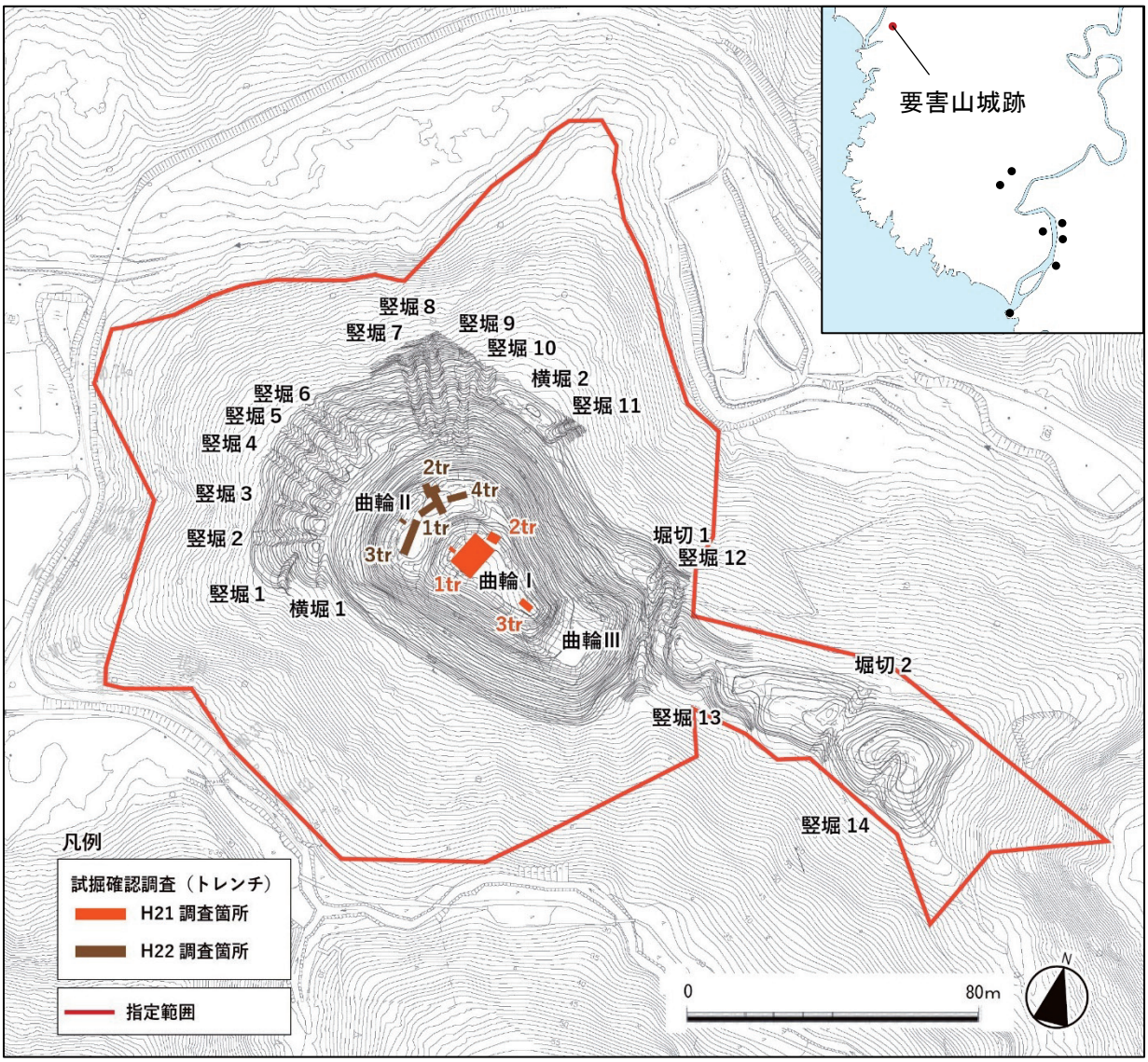

図 4-13 要害山城跡　指定範囲と測量図

写真 4-21 H22 調査(2tr)虎口　門礎石

写真 4-22 天目茶碗

（６）勝山城跡（追加指定候補）

１）立地

標高 212mの高所に位置し、安宅荘だけでなく海上も望める場所に位置する。東の尾根上には、すさみ方面からの侵攻を意識して、岩盤を掘り削った堀切・竪堀で防御している。この防御施設は麓からも遠望できるもので、安宅の湊に出入りする船舶に安宅氏の権力を誇示する目的があったと考えられる。

写真 4-23 勝山城跡　遠景

２）縄張りの特徴

勝山城跡の全体の規模は、東西約 130m、南北約 110mを測る。城跡の南側に位置する堀切 1 の全長は、約 35m、堀切 2 は約 40m、堀切 3 は約 53mを測り、堀切 1 と堀切 3 の比高は約 10mもあり、威圧感を感じさせている。城跡の規模と比較すると、曲輪の面積は狭小で、曲輪Ⅰは東西約 10m、南北約 23mを測る。平面形はやや細長の台形状を呈し、周囲には土塁が巡っている。この曲輪Ⅰからは、安宅氏居館跡、湊伝承地、八幡山城跡、大野城跡、中山城跡、土井城跡など安宅荘の城跡の多くを見下ろすことができる。

曲輪Ⅱは曲輪Ⅰの南側に位置し、東西約 13m、南北約 25mを測る。曲輪Ⅰとの比高は、約 5mある。曲輪の周囲を土塁が巡っているが、東側の一部が切れて平入りの虎口となっている。曲輪には礎石に使われたと考えられる平石が散乱しており、建物があったことが推測される。東の尾根状には、5 本の連続堀切が連綿と築かれている。堀切 4 の全長は約 12m、堀切 5 は約 13m、堀切 6 は約 15m、堀切 7 は約 23m、堀切 8 は約 42mを測る。城跡中心部に近いほど、堀切の規模が大きくなっている。

これらの堀切の土塁には、補強のためと考えられる石積みが施されている。これらは安宅荘の城跡に共通する築城技法であり、大向出城跡でも確認されている。岩盤を掘削した際に出土した岩を堀の内側に積むなど、労働力を投入して築いた山城である。未調査であり、表採資料も確認されていないため、時期比定は困難だが、ほかの安宅氏城館跡の山城と同時期に機能していたとみられる。

３）調査成果

調査年度	調査主体	調査方法	調査成果の概要
平成 19 年 （2007）	白浜町 教育委員会	測量調査	・ 城跡範囲の把握。

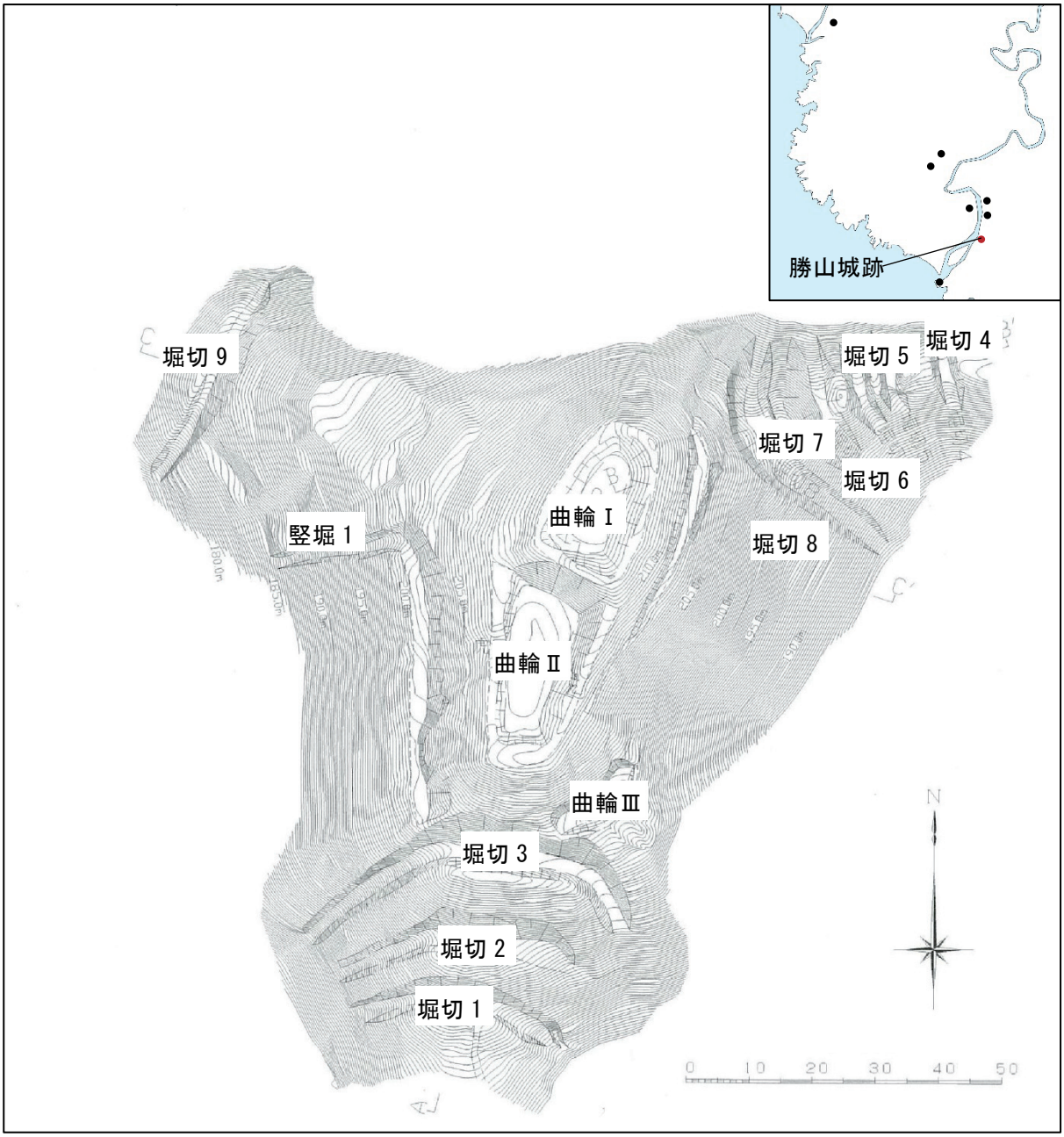

図 4-14 勝山城跡　測量図

写真 4-24 連続する堀切（堀切 4～8）

写真 4-25 堀の内側に石が積まれている様子